放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作る歌一首并せて
短歌

四〇一一番

大君の　遠の朝廷そ　み雪降る　越と名に負へる　天離る　鄙にしあれば　山高み　川とほしろし　野を広み　草こそ繁き　鮎走る　夏の盛りと　島つ鳥　鵜養が伴は　行く川の　清き瀬ごとに　篝さし　なづさひ上る　露霜の　秋に至れば　野もさはに　鳥すだけりと　ますらをの　伴誘ひて　鷹はしも　あまたあれども　矢形尾の　我が大黒に　白塗の　鈴取り付けて　朝狩に　五百つ鳥立て　夕狩に　千鳥踏み立て　追ふごとに　許すことなく　手放れも　をちもかやすき　これをおきて　またはありがたし　さ馴へる　鷹はなけむと　心には思ひ誇りて　笑まひつつ　渡る間に　狂れたる　醜つ翁の　言だにも我には告げず　との曇り　雨の降る日を　鳥狩すと　名のみを告りて三島野を　そがひに見つつ　二上の　山飛び越えて　雲隠り　翔り去にきと　帰り来て　しはぶれ告ぐれ　招くよしの　そこになければ言ふすべの　たどきを知らに　心には　火さへ燃えつつ　思ひ恋ひ息づき余り　けだしくも　逢ふことありやと　あしひきの　をてもこのもに　鳥網張り　守部をすゑて　ちはやぶる　神の社に　照る鏡倭文に取り添へ　乞ひ禱みて　我が待つ時に　娘子らが　夢に告ぐらく　汝が恋ふる　その秀つ鷹は　松田江の　浜行き暮らし　つなし捕る　氷見の江過ぎて　多祜の島　飛びたもとほり　葦鴨の　すだく旧江に　一昨日も　昨日もありつ　近くあらば　いま二日だみ　遠くあらば　七日のをちは　過ぎめやも　来なむ我が背子　ねもころに　な恋ひそよとそ　いまに告げつる